

中学校及び高等学校での総合的な学習の時間における 学びに関する学習者の事後の意識調査

福 島 知 津 子

A Study of University Students' Perceptions on the Learning through the subject of Integrated Studies at Lower and Upper Secondary Schools

Chizuko Fukushima

抄 録

平成 14 年（2002 年）より導入された総合的な学習の時間という科目が創設され 16 年が経過する。創設された本科のねらいは「実際の社会において活用できる資質・能力の育成を目指して創設された」であり、この 16 年間で全国の中学校及び高等学校にて実施された探求課題は多数、その内容も多岐にわたる。本研究は、中学校及び高等学校の 6 年にわたり総合的な学習の時間を通して学ばれたものが、大学進学者の生活にまたは将来の生活にどのように影響を与えたのか、今後の生活に生かすことができそうかという意識調査を行ったその報告である。調査の分析結果は、全体的に総合的な学習の時間を通して学ばれたことは学習者の中に印象強く残っており、将来に生かせそうであるという意識を持っている傾向にあるということが明らかとなった。

キーワード：総合的な学習の時間、探求課題、意識調査

(2018 年 9 月 25 日受理)

Abstract

In Japan, primary and lower secondary schools started teaching pupils the subject of Integrated Studies in 2002 and upper secondary schools started teaching it in 2003, following the stipulation by the Course of Study. The major objective of the subject is to foster pupils' practical abilities to live in the society and to obtain social skills. This paper aims to reveal perceptions of the university students who studied the subject of Integrated Studies at lower and upper secondary schools. The results show that the participants have positive impressions on the learning through Integrated Studies at each level of schooling. In addition, the results indicate the participants' belief that what they obtained through the subject will contribute to their work and lives in the future.

Keywords: the subject of Integrated Studies, educational activities, perceptions of the participants

(Received September 25, 2018)

1. はじめに

総合的な学習の時間は全国の小・中学校には平成14年(2002年)度から導入され、高等学校には翌年平成15年度(2003年)から学年進行で実施され、今年で少なくとも16年が経過する⁽¹⁾。この科目が創設される際に目標とされたことは、総合的な学習の時間は「実際の社会において活用できる資質・能力の育成を目指して創設された時間」なのである(田村、2017)。本科目では平成20年(2008年)度の学習指導要領の改訂に伴い、学習方法として「探求的な学習」が明示された(中野・加藤、2015)。新しい指導要領の総合的な学習の時間の目標に書かれた文のなかでも特に、この「探求的な学び」が重要とされており、「生徒に主体的で対話的で深い学び」が不可欠と言われている(田村、2017)。

文部科学省は平成14年(2002年)度から公立小・中学校における総合的な学習の時間の実施状況をおよそ隔年に一度の頻度で調査している(MEXT, 2004)。その調査項目は、実施時間数と実施された活動内容である。それは次章にて詳細を紹介したいが、実施調査はすでに公な機関でなされているが、総合的な学習の創設のねらいである、「実際の社会において活用できる資質・能力の育成」という目標を達成できているかどうかについて調査した研究は見当たらない。まだ歴史の浅い科目であるということ、加えて、学習者を卒業後に定期的に調査することが極めて困難という理由であろう。

本研究は、中学校及び高等学校において総合的な学習の時間を通して得られた学びについて、卒業後に学習者の意識にどのような印象があるのかについて調査し、その結果を分析したものである。その分析から、中学校及び高等学校を卒業後に総合的な学習の時間を通して学んだ内容に対し、どのような意識を持っているかについて明らかにするものである⁽²⁾。

2. 総合的な学習の時間の学習の目標

中学校における総合的な学習の時間は第1学年においては50時間、第2学年では70時間、第3学年では同じく70時間となっている。高等学校における総合的な学習の時間は学年ごとに決められているわけではなく、3年間を通じて、3～6単位となっており、学校によって柔軟に取り入れられるように定まっている。平成28年(2016年)度に公布された中学校及び平成30年(2018年)度に公布された高等学校の新たな学習指導要領にある総合的な学習の時間の目標を以下に引用する。

【中学校】

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。

(1) 探求的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課

題に関わる概念を形成し、探求的な学習のよさを理解するようにする。

- (2) 実社会や実生活の中から問いを見出し、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようになる。
- (3) 探求的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

【高等学校】

探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活と自己との関わりから問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
- (3) 探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。

高等学校の目標は、中学校で培った「探求的な見方・考え方」を活用し、発展させ、さらに今現在の生活と将来とを見据えて、課題を解決していく資質・能力を育成することを目指すとしている。これら中学校と高等学校の学習指導要領の総合的な学習の目標設定には、共通したものがある。それについては、学習指導要領の解説に以下のような記載がある（MEXT, 2018）。

総合的な探究の時間で育成することを目指す資質・能力については、他教科等と同様に、総則に示された「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」という三つの柱から明示された。

(MEXT, 2018 : 16)

これらは、中学校における「総合的な学習の時間」高等学校における「総合的な探求の時間」のみならず、他教科にも同じく、総則に書かれたものである。三つの柱を田村（2017）は以下のように説明している。

各教科で習得する「知識及び技能」が相互に関連付けられ、社会の中で生きて働くものとして形成されるようにすることが大切である。（中略）身に付けた「知識及び技能」の中から当面する課題の解決に必要なものを選択し、状況に応じて適用したり、複数の「知識及び技能」を組み合わせてたりして、適切に活用できるようになっていくことを「思考力・判断力、表現力等」と考えることができる。（中略）「学びに向かう

力、人間性等」についても、よりよい生活や社会の創造に向けて自他を尊重すること、自ら取り組んだり異なる他者と力を合わせたりすること、社会に寄与し、貢献することなどの適正かつ好ましい態度として「知識及び技能」が駆動できることと考えることができる。

(田村、2017：11)

総合的な学習の時間において育成したい資質・能力を確認したうえで、実際にそれらを身に付けるための具体的な探求課題、活動例はどうあるべきかを次章にて見ていくこととする。

3. 総合的な学習の時間の探求課題

学習指導要領にある総合的な学習の時間の目標を実現するにふさわしい探求課題については、奈須(2017)¹が従来の内容における「学習対象」を基本に考えるとよいとの言及があるので、本研究においては、それを参考に分類する。奈須¹(前掲:25)が提示する「探求課題」が兼ね備えるべき条件は以下の3つである。

1. 横断的・総合的な学習としての性格をもち、
2. 探求的な見方・考え方を働かせて学習することがふさわしく、
3. そこで育成される資質・能力が、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくことに結びついていくような、教育的に価値のある諸問題である

(奈須¹、2017：25)

そのうえで、提示している探求課題をまとめると以下の4つとなった。

- 1) 横断的総合的な課題：国際理解、情報、環境、福祉・健康
- 2) 地域や学校の特色に応じた課題：地域の暮らし、伝統と文化
- 3) 生徒の興味・関心に基づく課題
- 4) 職業や自己の将来に関する課題

前章にも記したように、これまで実施された探求課題、つまり活動例は全国にも多くありすべてを紹介はできないが、文部科学省が平成14年(2002年)度と平成27年(2015年)度実施した中学校における総合的な学習の時間の実施状況調査の結果を以下に引用する(MEXT, 2004)。

表 1：平成 14 年度調査（MEXT, 2004）

学習活動 (%)	横断的・総合的な課題					生徒の興味関心に基づく課題	地域や学校の特色に応じた課題	その他
	国際理解	情報	環境	福祉・健康	その他			
第 1 学年	23.1	28.9	46.8	44.3	43.7	45.7	68	10.5
第 2 学年	26.5	25.8	38.7	44.2	51.0	50.0	64.3	12.0
第 3 学年	35.3	28.6	35.9	46.1	49.8	56.1	58.8	11.8
全体平均	28.3	27.8	40.5	44.8	48.1	50.6	63.7	11.4

表 2：平成 27 年度調査（MEXT, 2016）

学習活動 (%)	国際理解	情報	環境	福祉・健康	伝統・文化	防災	まちづくり	キャリア	社会と政治	その他
第 1 学年	14.4	20	35.2	38.4	45.0	21.4	15.3	65.6	2.2	18.5
第 2 学年	15.6	19.2	24.3	29.3	43.0	19.5	10.1	88.8	4.1	18.4
第 3 学年	22.6	20.5	22.4	34.7	47.0	19.2	12.1	80.2	8.5	18.7
実施学校数	29.5	26.1	42.8	55.3	65.5	25.3	21.2	93.0	10.1	25.5

上記表 1 は、平成 14 年（2002 年）度に調査された総合的な学習の時間の活動内容である。当時の表の最下段は全体平均を提示していた。一方、平成 27 年（2016 年）度の調査結果、表 2 の最下段は、平均ではなく、実施学校数の割合を算出している。両者の比較で、着目すべきは、防災、街づくり、キャリアの項目が増やされ、キャリア教育はトライやるウィークなど、地域の会社等に中学生を受け入れてもらい職業体験をさせる機会が増えたことが特筆できる。防災の項目も度重なる災害に見舞われた日本各地の経験を元に防災教育が進んだ結果と言える。

このように実施された探求課題、つまり活動例はすでに公的機関により調査され世に公表されている。しかし、総合的な学習の時間の目標は、どちらかというと現在目の前にある問題を解決するだけでなく、「自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目指す」ことに重点が置かれている。「生きていく」と謳っている以上、学校を卒業しても尚、これらの学びが現在生きているか、今後生かせそうであるかという学習者の追跡調査は行われていない。よって、本研究において中学校・高等学校と 6 年間の総合的な学習の時間で学ばれたことが学習者の意識に影響しているかについて調査することとした。

4. 調査

4.1 調査内容

中学校及び高等学校にて計 6 年間の総合的な学習の時間（以下、総合学習と記す）においてどのようなことを学び、さらにはどのようなカテゴリーの活動が多く実践されたのか、それらは中学校と高等学校を卒業した後の現在において、学習者の意識にどのような印象

があるかについてアンケート形式にて調査した。

調査対象は文系大学所属の1年生から3年生までの40名(男女含む)である。ただし、途中で記載が無回答となった対象者の回答は無効とし、データ分析は38名分となっている。選択形式の設問には4件法の回答(4.00が最大値、1.00が最小値となる)を設定し、それらの回答理由などは自由記述回答を設定している。探究活動の分類は、前章の奈須¹(2017)を参考にし、4分類にその他を加えて5つとし、1.「ものづくり・生き物作り」、2.「地域に貢献する・地域のことを調べる」、3.「国際理解教育/環境問題/福祉・健康」、4.「職業体験/自分史や家族史」、5.「その他」と選択肢を設定した。さらなる具体的な設問に関しては最後の付録を参照願いたい。

調査の時期は2018年9月中旬である。調査対象は、大阪府内にある男女共学の大学の学部所属の2クラスである。学年の構成は大学1年生が20名、2年生が12名、3年生が7名、4年生が1名、合計40名である。上記の無効となった回答は2名、よってデータとして処理された有効回答は合計38名分となった。調査方法は、授業の一部を利用し、授業担当者によって記述式アンケート形式にて約10分間で実施された。

4.2 調査結果

上記の調査にて得られたデータをコンピューターに入力し、特に、4件法にて回答する設問4つの平均値を産出した。下記の表3にそのまとめを記す。「1. 中学校または高等学校での総合的な学習の時間で学んだことがこれまでの生活及び現在の生活に生きているという実感がある」という設問には平均値が2.76となっている。

表3：総合的な学習の時間の学びについての印象 (N=38)

1. 中学校または高等学校での学びが実生活に生きている	2.76
2. 中学校と高等学校では総合的な学習の時間の活動に違いがある	2.47
3. 中学校での学びが将来に生かせそう	2.92
4. 高等学校での学びが将来に生かせそう	2.68

※最大値 4.00 から最小値 1.00 の平均値

これは最大値 4.00 から最小値 1.00 の平均値 2.00 を勘案すると「まあそう」の回答が多いと言える。「全然そうではない」を選択した者は38名中、0であったことも注目できる。「2. 中学校と高等学校の総合学習には大きな違いがあった」という設問には、平均値が2.47となった。「3. 中学校での総合学習で学んだことは将来生活の中で生かせそう」という設問には、平均値が2.92となった。これについては、3.00は「まあそう」という選択肢であることを勘案すると、参加者は中学校での総合学習は将来の生活に生かせそうだとおおむね考えていると言えよう。「4. 高等学校での総合学習で学んだことは将来生活の中で生かせそう」という設問には、平均値が2.68となった。これは先の3. の回答よりは低い結果ではあるが、「まあそう」と「あまりそうではない」の間にあると考えられる。

福島：中学校及び高等学校での総合的な学習の時間における学びに関する学習者の事後の意識調査

次に、中学校と高等学校を合わせて、参加者の中に最も印象に残っている総合的な学習の時間における活動例を分析した。その結果を以下、表4に記す。最も印象に残っていると回答した校種は高等学校のほうが少し上回る結果となっている。

表4：最も印象に残った総合学習の活動時期

Q	中	高	合計
N	16	22	38

しかし、それらの活動期間は下記、表5にあるように期間が長期であったので、印象に残るといよりは、ゲストスピーカーに1回講演をしてもらった話の内容であったりと、総合学習の活動に携わった時間の長さにはあまり関連がないように見受けられる。

表5：最も印象に残った総合学習の活動の実施期間

期間	1月未満	2～3月	1学期	1年間	複数年	合計
N	16	3	6	4	9	38

さらに着目すべきは、次の校種別の印象に残った活動の事例である。次の表6は、最も印象に残ったものは、中学校における総合学習における活動であり、それらに回答した参加者の具体的な活動事例である。中学校における総合学習の活動例は、「1. ものづくり・生き物を育てる」以外はどれも記載があった。中でも「職業体験」についての回答が複数書かれていた。

表6：中学校での総合学習にて最も印象に残っている活動内容

1	ものづくり・生き物を育てる	—————
2	地域学習	地域について学ぶ / 地域にボランティア
3	国際理解教育・環境問題・福祉や健康	韓国の人が来て交流 / 豪州にある姉妹校の留学生との交流 / オープンマインドで世界を見る
4	職業体験・自分史や家族史	老人ホームで活動 / 職業体験
5	その他	人権教育 / 席替え / 体育館でスポーツ / 学年集会 / レクリエーション / 校外学習や修学旅行の準備

一方、次頁に記す表7は最も印象に残ったものは、高等学校における総合学習における活動であり、それらに回答した参加者の印象に残った具体的な活動事例である。「1. ものづくり・生き物を育てる」、「地域学習」、「職業体験・自分史や家族史」の項目は見当たらない。実際には行われた可能性もこの調査からでは否定できないが、参加者の印象に最も強く残ってはいないものと判断すべきであろう。高等学校での総合学習の実践例で目立ったものは、外部の講師による講演である。

表7：高等学校での総合学習にて最も印象に残っている活動内容

1	ものづくり・生き物を育てる	————
2	地域学習	————
3	国際理解教育・環境問題・福祉や健康	ALT とのマンツーマン会話 / 環境保全の祭り / 人種差別
4	職業体験・自分史や家族史	————
5	その他	車椅子バスケットボールの選手のお話 / 教員のこども時代 / いじめについて / 人権教育 / 部落差別 / 行事の打ち合わせ / 英語でプレゼン / お笑い / ジェンダー / 受験対策 / 進路の話 / 自習

前掲表5に関わることであるが、前述したように関わった実践例の期間が短くとも、このように外部講師は1度しか生徒たちと接することはないが、強い印象を残していると言える。以上の分析を通して、「これまでの生活に生かしている」、また「印象に残っている」活動例を詳細に見てきた。

次に、参加者が回答した中学校または高等学校で学んだ総合学習の活動例の中で今までや現在の生活の中で生かしていると思う活動例についての分析について述べる。以下表8は総合学習で学んだ内容が現在までに生かしている実感できている具体的な活動例4分類に「その他」を加えた、5分類の中から選択されたものを示している。回答方法は選択形式で複数回答を可能としたため、分析人数38名の人数よりも合計数が多くなっている。

表8：現在に生きていると実感できる活動 (N=38)

	活動内容	N	%
1	ものづくり・生き物を育てる	1	2%
2	地域学習	3	7%
3	国際理解教育・環境問題・福祉や健康	17	40%
4	職業体験・自分史や家族史	13	31%
5	その他	8	19%
	合計	42	100%

活動内容の割合を数値で見ると、「国際理解教育・環境問題・福祉や健康」に関する活動例が最も多く40%、次に「職業体験・自分史や家族史」に関する活動例が31%となり、それらの合計だけで、71%となる。

次に参加者それぞれの中学校と高等学校における総合学習の活動例について、実施された具体的な活動の割合を見る。これも複数回答が可能としたので、38名の分析からそれ以上の回答数を得ることができた。以下表9は、将来生かせるであろうと思われる活動例を中学校と高等学校の校種ごとに分類したものである。

表9：将来に生きるであろうと思われる活動（N=38）

	活動内容	中学校における活動		高等学校における活動	
		N	%	N	%
1	ものづくり・生き物を育てる	5	11%	2	5%
2	地域学習	14	30%	6	14%
3	国際理解教育・環境問題・福祉や健康	13	28%	22	50%
4	職業体験・自分史や家族史	11	24%	7	16%
5	その他	3	7%	7	16%
	合計	46	100%	44	100%

中学校での活動例は、前掲の表6にもあったように、どれもバランスよく実践できており、その中でも「地域学習」が最も将来の生活に生かされそうだと回答している。一方、高等学校における総合学習の活動例で最も将来の生活に生かされそうなものは、「国際理解教育・環境問題・福祉や健康」である。なかでも印象に残っている活動例の中にも挙がっていた「国際理解教育」が最も将来の生活に生かされそうである、という回答が多い。

分析の最後に、中学校及び高等学校において行った活動例が自分の将来に生かせそうであるかについての理由（記述解答）を示す。以下表10は、活動例を校種に関わらず、将来自分の生活に生かせそうだと思う活動例をすべて記載したものである。「1. ものづくり・生き物を育てる」に該当する記載はなかった。「2. 地域学習」に該当するものが将来生かせそうだという理由については具体的に多くのコメントが書かれていた。修学旅行で実際に訪れる地元以外の土地について調べることで、日本国内にも地域差や違いがあることを知り、それは将来に生かせそうだという内容や、大学生なので、将来社会で働くときに役立てることができそうだという内容も見受けられる。最も多かったのは、「3. 国際理解教育」に関する理由である。それも「外国」や具体的な国名などの単語ではなく、「異なる

表10：総合学習にて実践した活動内容が将来生かせそうだと思う理由

1	ものづくり・生き物を育てる	なし
2	地域学習	地域との密接な関係を調べたので、災害に被災したときに生かせそうだと修学旅行先の長野県について勉強し、土地ごとの特色に興味を持った/将来社会に出たときの大変さを知ることができ地域の連携の大切さを知ることができる/将来地元から離れて生活をするつもりなので、新たな生活の場で対応できると思う
3	国際理解教育・環境問題・福祉や健康	異なる国で生まれ育った人たちとのコミュニケーションの場で、相手の言動を理解するために役立つ/異文化を知れるから/様々な人があり、そのような人がどんな扱いを受けているかを知ったことで、鵜呑みにせず、自分がなにかしら行動できるのではないかと思う/グローバル化が進む中でより深刻になると思うから/健康や体についてよく知れた
4	職業体験・自分史や家族史	自分が就きたい職業の範囲が広がった
5	その他	そのような人に出会うことがあったときに役立つ/常識が身についた/戦争について/入試の概要説明会/あまり覚えていない

文化]、「異文化」、「グローバル化」という単語が見られる。「4. 職業体験」を選択した回答には、あまり理由が書かれてはいない。最後に、「5. その他」に該当する理由として、LGBTに関する学びなどはそういう立場の人に出会ったときに将来役立てそうだ、という内容が見受けられた。戦争についての学びは指導要領の解説に分類された4項目に該当がなかったので、「5. その他」に分類されると考える。最後にこの項目に含めたものとして、「記憶にない」、「何かを学んだという覚えがない」という回答が4件見られた。

5. 考察

総合的な学習の時間は、基本的に学校として年間計画を立て、評価も行われる科目である。中学校及び高等学校の担任教員が担当クラスに実施するので、教科担当がいない科目である。つまり、英語科教員や理科科教員が担任を受け持つ場合、責任を持ってこの科目の授業を1年間実施し、評価までしなければならない科目ということである。しかし、「総合的な学習の時間のための効果的な教授法」というものを目にしたことがない。つまり、まだ実施されてから16年しか経っておらず、ようやくその科目を受けた卒業生が社会人になって自分の家庭を築き、というところであろう歴史の浅い科目である。さらに述べると、学習効果を数量的に計測することはかなり困難な科目と言える。しかも、教科目のようにその能力だけを計測し、学習効果があったと喜ぶことはできない。なぜならば、この科目のねらいは「実際の社会において活用できる資質・能力の育成を目指す」とされている。この学習効果を在校中に計測することは不可能に近く、学習した後に経年変化を経てようやくその成果がでることを臨まれている「教育」らしい科目である。故に、研究として臨むことができたのは、高等学校卒業後数年を経た学習者の意識調査であった。

この科目の授業実施時間数は他の教科目と比較すれば少ない。にもかかわらず、実施された活動事例に関して、中学・高等学校の校種を問わず、総合的な学習の時間に対する肯定的な意見が多かった。教科の勉強と関連付けられた指導も望まれているが(奈須²、2017)、はたして毎週の総合的な学習の時間にそのような活動例が豊富にあったとは本調査結果からは言えない。しかし、国際理解教育、環境問題、地域学習などは英語、理科、社会科にも十分関わる内容であることは推察される。

加えると、ベネッセ教育研究開発センターが実施した総合的な学習の時間に関する調査(2013)には、総合的な学習の時間削減に反対する保護者の意見が増加しているというものがある(朝日新聞、2013)。「学校教育に対する保護者の意識調査」によると、平成20年に行った調査では、総合的な学習の時間の削減案に「賛成」または「どちらかといえば賛成」が48.0%であったが、平成24年には23.8%に減少している。つまり保護者は家庭でのこどもとの何らかのやりとりを通して、総合的な学習の時間を肯定的に見ていると捉えられる。「削減」に否定的な意見が半減という事実も見逃してはならない。

データ分析から記述すべき最後の項目は、数は少ないが、総合的な学習の時間の活動例として「席替え」や「自習」と回答している(N=4)場合、これまでの生活や今後の生活

に役立つと思うか、という問いに「あまりそうではない」(N=2)と「全然そうではない」(N=2)という回答になっている事実である。つまり、総合的な学習の時間に対する否定的な印象になっていると言わざるを得ない。指導の観点からは至極当然に思われるが、川本(2007)にあるように、「高校受験を控えた中学校には、その受験内容に直接関わらない総合的な学習の時間は教師の重要な課題になり得ないのかもしれない」という指摘も無視できない。

本調査の分析結果から、総合的な学習の時間に対する肯定的印象と否定的印象との間にある差は、実際に行われた活動内容の差であると言えよう。学校として年間計画をたて、長期にわたる活動ではないワンショットの外部講師による講演を実施するだけでも、学習者の意識に肯定的な印象を与えていることが明らかとなった。本研究の核となる部分であるが、それが中学校または高等学校を卒業した後も、学習者が将来生かせそうな学びであったと意識していることが、分析結果から明らかとなった。回答の中には、「何をしたか覚えていない」や「ほとんど記憶にない」というものもあるが、それは肯定とも否定的とも断言できない。これらの回答をした参加者が今までに生かせてはいないが、これから社会の一員となったとき、思い出し、それが帰納的な学びとなることも可能性としては否めない。しかし残念ながら、教員が総合的な学習の時間に「席替え」や「自習」としてしまった場合、学習者の意識に残った印象は、将来学習者の帰納的な学びになるとは考えられない。この調査の結果に現れているように、多忙な業務の中にあっても、学校ごとに創意工夫をし、外部講師から貴重な話を生徒に聞かせる体験をさせたことや、地域のコミュニティのことを実態調査する、さらにはその地域の人たちとの交流を深めたという活動をしての経験は、生徒が在学中もそして、少なくとも卒業した数年にわたり彼女たち・彼らの意識に肯定的な印象を与えている。つまり、学校及び教員の苦心、工夫は報われていると言える。

調査結果の分析から、中学1年生は年間50時間、2、3年生は年間70時間、高等学校においては3～6単位分従事する総合的な学習の時間が学習者の意識にここまで印象に残っているという結果を得て、教員としては幸いであり、多忙な中、授業を構成し実践する今後の励みになることが示された。今後はさらに調査参加者の分野を文系学生以外に理系学生も含め、学習者の意識の経年変化を見ていく必要がある。それについては稿を改めたい。

注

- (1) 小学校及び中学校における総合的な学習の時間は平成14(2002)年から導入され、学習指導要領の改訂により、校種ごとに段階的に施行され、高等学校における総合的な学習の時間は平成15(2003)年から実施されている。
- (2) 本研究は中学校と高等学校の担任教員による総合的な学習の時間がどのように実施され、それに対する学習者の意識調査を主軸としている。小学校は第3学年から総合的な学習の時間は設定されているが、次の理由により、本研究には小学校におけるそれは含めないと判断した。中学校と高等学校の総合的な学習の時間は教科を専門とする担任教員によって授業が行われる。それは小

学校の担任教員とは性質を一にするものとする。小学校には総合的な学習の時間につなげるための「生活科」が第1学年・第2学年に設定されており、小学校教員はその生活科において総合的な学習の時間の基礎を構築したうえで、総合的な学習の授業を実施する。これは中学校及び高等学校の担任教員とは条件が異なると判断したものである。2つ目の理由は、小学校から高等学校卒業時までを同時にアンケート調査をすると、参加者の記憶の混乱を招くリスクも上ると危惧した。

引用・参考文献

- 朝日新聞・ベネッセ教育研究開発センター (2013) 「学校教育に対する保護者の意識調査」(2013年3月28日掲載).
- MEXT (2004) 「総合的な学習の時間の実施状況」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siry/attach/1397177.htm
- MEXT (2007) 「平成19年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査の結果について」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siry/attach/1268958.htm
- MEXT (2016) 「平成27年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査の結果について」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1368193.htm
- MEXT (2016) 「平成27年度公立高等学校における教育課程の編成・実施状況調査の結果について」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1368209.htm
- MEXT (2016) 『中学校学習指導要領 総合的な学習の時間』.
- MEXT (2018) 『高等学校学習指導要領 総合的な学習の時間』.
- MEXT (2018) 『高等学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』.
- 川本光 (2007) 「『総合的な学習の時間』の効果に関する研究：「開かれた学校」づくりの視点から」
滋賀大学教育学部紀要、57号、pp. 125-133.
- 中野真志・加藤智編著 (2015) 『改訂版探求的・協同的な学びをつくる－生活科総合学習理論と実践－』
三恵社：愛知.
- 奈須正裕 (2017)¹ 「内容のポイントと解説」田村学編著『中学校新学習指導要領の展開 総合的な学習編』明治図書出版株式会社、pp. 24-25.
- 奈須正裕 (2017)² 「他教科等で育成を目指す資質・能力との関連」田村学編著『中学校新学習指導要領の展開 総合的な学習編』明治図書出版株式会社、pp. 28-29.
- 田村学 (2017) 『中学校新学習指導要領の展開総合的な学習編』明治図書出版株式会社：東京.

付 録

中学校・高等学校における「総合的な学習の時間」に関するおたすね

この「おたすね」の目的は「総合的な学習の時間」に関する研究のために実施するためのものでご協力をお願いします。回答は一切成績には関係はありません。各質問に対して、該当する回答番号（ア～I（オ））を○で囲んでください。また記述箇所は、率直な意見を日本語で書いてください。

0. あなたの現在の学年を教えてください。[大学 1年・2年・3年・4年] ※<○をつけてください>
1. 中学校または高等学校における「総合的な学習の時間」で最も印象に残っているものについて書いてください。活動の内容は、以下にある質問3.を参考にして記入しても良いです
- 【 いつごろ 】 中学校 ・ 高等学校 ※<どちらかに○をつけてください>
- 【 どんな活動をしたか 】 []
- 【 どれくらいの期間 】 1ヶ月未満 / 2～3ヶ月間 / 1学期間 / 1年間 / 複数年間
2. 中学校または高等学校における「総合的な学習の時間」で学んだことが、これまでの生活および、現在の生活に活きていると実感できる。
- ア). まったくその通りだ イ). まあそうだ ウ). あまりそうではない エ). 全然そうではない
3. 上記2. の答えに対し、これまで及び現在にわたり、どのような活動が実際に活かせていますか。 <複数回答可>
- ア). ものづくり・生き物を育てる イ). 地域に貢献する・地域のことを調べる ウ). 国際理解教育/ 環境問題/福祉・健康
エ). 職業体験・自分史や家族史 オ). その他 []
4. それは具体的にどのように生活体験に生きていますか。できれば、ご自分の体験を紹介ください。
- []
5. 中学校と高等学校における「総合的な学習の時間」の2つを比較すると、その内容に大きな違いがあった。
- ア). まったくその通りだ イ). まあそうだ ウ). あまりそうではない エ). 全然そうではない
6. 上記5. でア)とイ)を選んだ人は、その違いを具体的に書いてください。
- []
7. これからの将来、生活をしていくなかで、中学校での「総合的な学習の時間」の中で学んだことは活かせると思う。
- ア). まったくその通りだ イ). まあそうだ ウ). あまりそうではない エ). 全然そうではない
8. 上記7. の答えに対し、どんな活動が将来、活かせそうですか。 <複数回答可>
- ア). ものづくり・生き物を育てる イ). 地域に貢献する・地域のことを調べる ウ). 国際理解教育/ 環境問題/福祉・健康
エ). 職業体験・自分史や家族史 オ). その他 []
9. これからの将来、生活をしていくなかで、高等学校での「総合的な学習の時間」の中で学んだことは活かせると思う。
- ア). まったくその通りだ イ). まあそうだ ウ). あまりそうではない エ). 全然そうではない
10. 上記9. の答えに対し、どんな活動が将来、活かせそうですか。 <複数回答可>
- ア). ものづくり・生き物を育てる イ). 地域に貢献する・地域のことを調べる ウ). 国際理解教育/ 環境問題/福祉・健康
エ). 職業体験・自分史や家族史 オ). その他 []
11. 上記8. と10. で選んだ項目に関して、そのように思う理由を教えてください。
- []

ご協力いただき、ありがとうございました

